

2013. 6. 23 聖別会

IMMANUEL

インマヌエル
中目黒キリスト教会
聖別会マンスリー



2013年

グレイトハウス著「主が聖であられるように」

Ⅸ. ローマ書における聖化

(3) 律法に死ぬことが聖化

テキスト：

「あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」(ローマ7:4)

6章は「罪と自己に死ぬことが聖化」

7章は「律法に死ぬことが聖化」

A. 律法からの自由(1-6節)

■問題：ユダヤ人クリスチャンの多くは、「律法の命令を遵守することによってホーリネスを達成できる」と信じていた。

■答え：律法に聖化の力はない。キリスト者は、「律法」という夫に縛られていたが、夫が死に、新しい夫に結ばれたので、律法という夫の管轄権から自由になった。罪を刺激する律法という夫と結ばれていた間は、肉の行いという実を結んでいたが、キリストと結ばれた今は、御霊の実を結んでいる。

B. 律法の機能（7-13節）

■問題：肉の実を結ばせた律法は、悪いものなのだろうか？

■答え：決してそうではない。律法は罪を罪と認めさせるという大切な役割を果たした。しかし、律法は、罪を誘発する副作用もあった。神と人に対して正しくあろうという一見健気な心が、実は罪深さを増している。

C. 内住の罪（14-25節）

■問題：律法と罪との関係は？

*この文節での「私」は、パウロ自身の現在的な経験を述べているのだろうか。著者は、NOという。その理由は、1-6節で、キリスト者は律法に対して死んだものと宣言しているからである。この「私」は、律法と遭遇して生き返り、罪に支配されている「私」、正確には、教会の迫害者であった頃の自分を描いている。

■答え：内住の罪は深刻で、律法によって制御される範囲を超えている。神の恵みから離れて法的義の要求を満たそうとするどんな試みも役に立たない。唯一つの道は、自己と自己信頼に死ぬことである。

おわりに：律法の無益さは、御霊の命の原理の勝利へと私たちを導く（これが8章のテーマ）。